九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

森鴎外「蛇」論 : 近代科学的現実の中の前近代的現実

河内, 重雄
北九州市立大学文学部 : 准教授

https://doi.org/10.15017/4402935

出版情報：語文研究. 129, pp.27-40, 2020-06-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

森鷗外「蛇」論

――近代科学的現実の中の前近代的現実――

河内重雄

一　本稿の狙い

森鷗外「蛇」（『中央公論』明治四十四年一月）は、理学博士の「己（おれ）」[注1]を語り手とする、一人称の小説である。時は小説発表当時の夏の夜。「己」は信州の山の中の穂積家に一晩泊ることになる。人気（ひとけ）の少ない大きな家に、女の不可解な話し声が絶え間なく聞こえるので、「己」は女のことを聞こうと思い、穂積家の一切を取り仕切る清吉と縁側で話をする。問われるままに、清吉は主人である穂積千足（ちたる）、その母の「御隠居」、千足（ちたる）の妻の「お豊」のことを語り、「己」は嫁と姑の間がうまくいっていなかったことを知る。話の途中で、二人の話を盗み聞きしていた千足（ちたる）が話に加わり、先ほどまでの不可解な話し声は気の違ってしまったお豊のものであることが分かる。清吉によると、お豊の気が違ってしまったのは、御隠居が亡くなった初七日の晩、お豊が線香をあげようと仏壇をのぞいたところ、大きな蛇がとぐろを巻いていて、鎌首をあげてお豊をじっと見たからだという。何度捨てても蛇は仏壇に戻ってくるので、若い衆は御隠居の祟りのように思っているが、清吉は迷信とかいうものかと思い、「己」に意見を求める。「己」は、蛇は米蔵から天井伝いに来たのだろう、再び仏壇に戻るのは習性によるものだと説明し、蛇をつかまえて魚籠に入れてしまう。翌朝、お豊を診ている医者は精神病の専門家でないことを知った「己」は、東京から専門家を呼ぶよう勧告する。

先行研究については、一柳廣孝「蛇はそこにいる――森鷗外「蛇」における怪異」[注2]を除けば、「蛇」（以下、本作とする）に

おける近代科学の観点から見てリアルな側面のみを、解釈上俎上に載せている点で、共通していると言ってよいであろう。本作を大逆事件と関連付けて解釈する大塚美保氏[注3]や、普通選挙運動に関する調査・考察を読みに還元する原貴子氏[注4]の研究は、鴎外と関わりのある同時代の現実の出来事に引き付けて、それぞれ本作を解釈している。池田嘉穂子氏[注5]も語り手の「己」に注目し、理性をキーワードに、本作の解釈を試みている。竹盛天雄「鴎外　その紋様・その16「蛇」について――『寂しき人々』を補助線として（二）」[注6]など、本作に鴎外の私生活の反映をみる論も少なくない。

先行論の中で筆者が注目するのは、天野愛子氏の次のような指摘である。

（略）争いごとをせず、のんびりとのどかに生きよ、というこの「和気日冲融」の教えは、不満を抱かず大らかに生きよ、という「知足」の境地と同じ意味合いを持つ。

穂積家は、自我を通そうとして発狂したお豊を抱えている点で「知足」とは真逆の環境にある。お豊は、恵まれているものごとに目を向けて豊かに生きることができなかった人物として描かれており、だからこそ余計に、この名前が皮肉なインパクトをもって響いてくる。

穂積家の主人として、どうしたらいいか分からずもがき苦しむ「千足」は、「ちそく」と読めば「知足」と同音異義語になる。現状に目を向け、どっしりと構えていられれば、お豊の発狂も招かなかったとするこの当主の後悔は、「知足」の観念の欠如から派生している。[注7]

氏が「「千足」は、「ちそく」と読めば「知足」と同音異義語になる」と述べるのは、本作と「高瀬舟」（『中央公論』大正五年一月）に、知足というテーマが共通して見出されることを、際立たせるためである。なるほどそれはその通りであろう。しかし、この千足（ちたる）という名は知足を意識して付けられた名前だという指摘は、次のようなことをも示唆するのではないか。すなわち、本作には前近代的な物語の要素が混在している、ということである。

特に何ものをも意味しない、平凡な固有名をもった人物が登場することが、近代リアリズム小説の特徴の一つだとすれば、前近代的な物語の特徴の一つは、類型的な意味をもち、物語の展開等と関わりをもつ名を付けられた人物が登場する点にある。前者の例では二葉亭四迷『浮雲』（明治二十～二十二年）が、後者の例では滝沢馬琴『南総里見八犬伝』（一八一四～一八四二年刊）などが挙げられよう。前者は科学的にリアルな

小説世界を構築しようとするのに対し、後者は妖怪が出てくるなど、近代以降の目から見ると非科学的な世界であることも珍しくない。いささか乱暴であることは承知の上でこのようにまとめると、本作には、その両方の要素が混じり合っている。生前の仕打ちを怨んで、蛇となって化けて出た御隠居を見て、気が違ってしまうお豊と、仏壇に蛇がい続けることを合理的に説明する「己」とは、同じ小説世界にいながら異なる現実を生きている。怨んで化けて出たのを見て、気が狂ってしまうというのは、前近代的な物語の一つの典型である。

天野氏の指摘について少し補足すると、例えば市子貞次編『国書人名辞典』[注8]には、千足という人名は見られない。国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』[注9]には、糸永千足、匂坂千足、館松千足、津村千足、野田千足、横井千足の六つが確認できる。凡例には、読みは一般的な呼称例によった、二通りの読み方が伝えられているものは併記したとあり、千足は「ちたり」と読む方が一般的だったようである。言うまでもなく、知足は足るを知ること（足りを知るではない）。なぜ千足なのかと天野氏が問うのも、うなずけるのではあるまいか。

本稿では以下、本稿で言うところの近代リアリズムの要素、前近代的物語の要素について考察する。そのための下準備として、次の二では本作に散見される境界的な記述・描写について、詳しく述べようと思う。近代でありかつ前近代でもあることと関わるからである。

二　本作における境界的な記述

本作は、「己」が穂積の家の「縁側」で庭をぼんやり眺める描写で始まる。縁側とは、家の内と外との境界線にあたる部分、そのどちらでもある場所である。東京・外部からやって来た「己」は、ほんのひと時、近代・外部と前近代・内部の混じり合った場所にとどまり、小説の最後で外部へと出ていく。本作の大枠については、ひとまずこのように言うことができよう。

場所ということで付け加えて言うと、「己」が泊まることになった穂積家は「信州の山の中の或る駅」にある。狐狸に化かされたり、神隠しがあってもおかしくない信州の山の中（前近代）にある訳だが、一方で宿場町（駅）という、交通機関の発達した商業集落の一部でもある。穂積家のある場所についての記述も、近代と前近代のどちらにも属しているような書き方と言える。

この「信州の山の中の或る駅」については、具体的にどこの山かなど特定可能だ。[注10]しかし、特定することに意味がある

かどうかは別問題であろう。重要なのは、「信州の山の中」や「或る駅」という言葉が使われているということであり、それらの言葉の概念・ニュアンスである。本作には「長野」という地名も出てくるが、「長野県の山の中」などとすると、近代のニュアンスが強くなってしまう。古くから使われている信州という地名は、土地にまつわる昔からの言い伝えなどを読者に想起させ得ると考えられる。駅についても、必要なのは交通の要所であり、経済的に発展した集落という一般的な機能（概念）だからこそ、「或る駅」としているのではあるまいか。駅一般のもつイメージが必要だったから、具体的な名称を避けたと考えられよう。

時間設定に関しても、境界的と言える。小説は夏の夜の十時頃から始まり、小説の最後は翌朝となっている。「己」が清吉や千足と話をし、蛇を魚籠に入れた時、「丁度時計が十二時を打つた。」とある。夜中の十二時は、前日でもあり翌日でもあるという境界線上の時間である。ここでも注意しておきたいのは、境界線上にいるのはひと時のことで、やがては朝がくるということだ。冒頭に「明け易い夏の夜」とあるが、夜・闇・前近代と朝・光・近代のはざまに立ち続けることはできない。場所に関してと同様、境界線上から近代の方へ向かう流れが認められよう。

時間や空間以外にも、境界線上を思わせる描写は散見される。例えば、蚊遣りの土器から立ち昇り、渦巻く青い烟（けむり）は、先行論の指摘するごとく蛇を連想させる。先行論では小説の冒頭と結末の対応を見ているが、本物の蛇と、蛇のように見える烟が小説世界に共存していると考えることもできよう。蛇のように渦巻く青い烟に怪談めいたものが感じられるとすれば、蛇のような烟（前近代）とリアルな蛇（近代）の共存する世界と解することができる。

お豊は「狂人」とされているが、「狂人」というのも、現実にいながら非現実を見るという、いわば境界線上の存在と言うことができよう。蛇が現れた「仏間」も、この世とあの世をつなぐ場所、そのどちらでもあるような場所と言えるのではあるまいか。御隠居が亡くなって「明日で二七日（ふたなぬか）」（十四日目）とあるが、死後四十九日の間は「忌中」である。死んで仏となるまでの間であり、境界的な期間と言えよう。

お豊に関して付け加えると、彼女は東京の高等女学校を卒業しているが、信州の方言の抜けきれない人物とされている。

> 土地の訛（なま）りの、にいと云ふ弓邇波（てには）が、珠数（じゅず）の数取（かず）りの珠（たま）のやうに、単調にしやべつてゐる詞（ことば）の間々に、はつきりと聞える。東京で、ねえと云ふところである。ここは信

州の山の中の或る駅である。

同じ土地の者でも、子供の頃から東京で働いていた清吉には、信州の訛りはない。小説の最初の方には、「己」が清吉に対し、「お前詞が土地の人と違ふぢやないか。」などと言う場面がある。お豊が信州の言葉を使うということは、彼女が信州＝前近代の現実を生きていることを意味する。東京で近代的な教育を受けながらも、土地の言葉を使うというのも、境界線的と言えるのではあるまいか。

言葉ということに関し、最後に指摘しておきたいのは、「迷信」という言葉の新しさについてである。蛇は御隠居の祟りかもしれないということについて、清吉は「迷信とか申すものかと存じますので」と自らの意見を述べ、「己」に相談している。気を付けたいのは、「迷信かと存じますので」という言い方ではない点、「とか申すもの」という表現が使われている点である。このことは、迷信という言葉が、当時の日本において十分に定着していないことを示すのではないか。

日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』[注11]では、小林雄七郎『薩長土肥』（明治二十二年）における用例が、「迷信」という言葉の最も早い用例として挙げられている。その次は土井晩翠『暁鐘』で明治三十四年。あとは夏目漱石の『明暗』における用例である。中村幸彦他編『角川古語大辞典』[注12]などの古語辞典に関しては、管見では「迷信」の項目はない。また、インターネットにおける検索サービス「中国哲学書電子化計画」は、かなりの分量の漢籍の用例を検索できるが、「迷信」と入れて検索してもヒットしなかった。諸橋轍次『大漢和辞典』[注13]には「迷信」の項目こそあるが、用例は挙げられていない。漢籍にも存在しない言葉のようである。

以上から、迷信という言葉は、明治以降につくられた言葉と推測される。近代科学の本格的な輸入とともにつくられた言葉ではなかろうか。だとすれば、明治四十年代の時点（本作発表時点）では、まだ一般によく知られた言葉でなかったとしても不思議はない。子供の頃から東京で働いていた清吉は、迷信として見る見方を知っているが故に冷静でいられた。高等女学校以外を信州で暮らしたお豊は、迷信という近代的な見方を知らず、一途に化けて出たと思い込んだが故に気が違ってしまった。これは少々単純化の過ぎる把握かもしれないが、お豊が迷信という言葉を知らない可能性は、十分にあり得るのではあるまいか。まだ定着していないという意味で、迷信という言葉自体、境界線上にあると言えよう。

以上、本作における境界的な記述や設定について述べた。それらは基本的に、近代と前近代の共存を示しているが、小

説の展開に即して言えば、近代へ向かおうとする流れが認められる。次の三ではお豊を中心に本作における前近代性について述べ、四で近代性について考察する。

三　前近代にける蛇と女の物語

御隠居の初七日の晩に、お豊は仏壇の蛇を見て気が違ってしまう。言うまでもなく、蛇そのものが恐ろしいのではない。子供の頃を信州で過ごしたお豊は、これまで蛇くらい何度も見たことがあるはずだ。気が違ってしまったのは、御隠居と蛇とを結び付けて受けとめたからに他ならない。

前近代の物語における蛇と女の結び付きについては、高田衛『女と蛇　表徴の江戸文学誌』[注14]に詳しい。『女と蛇』では近代の小説も多数取りあげられていて、本作への言及も見られる。同書より、女と蛇が結び付けられる時のキーワードとしては、「淫」（淫乱さ）や「執念」を挙げることができる。

淫や執念を共通項として、女が蛇に、または蛇が女になる物語としては、怪異説話集『奇異雑談集』（一六八七年刊）の「戸津坂本にて女人僧を逐（おっ）て共に瀬田の橋に身をなげ大蛇になりし事」、同『善悪報はなし』（一六九七年刊）の「女、愛執により蛇になる事」、上田秋成の読本『雨月物語』（一七七六年刊）の「蛇性の婬」などが挙げられよう。[注15]「戸津坂本にて女人僧を逐（おっ）て共に瀬田の橋に身をなげ大蛇になりし事」は、僧を恋い慕う婦人が生きたまま大蛇と化し、僧を執拗に追いかける話である。「女、愛執により蛇になる事」は、報われぬ恋により死んだ少女が、大蛇となって恋する少年と契りをかわす話。蛇に取りつかれた少年は、その後まもなく死んでしまう。

上田秋成「蛇性の婬」は、邪神である蛇が真女児（まなご）という名の美しい女性に化け、美貌の豊雄を執拗く我がものにしようとする話である。豊雄は一度は真女児（まなご）を退け、美しい富子を妻に迎えるが、新婚二日目の夜、真女児（まなご）は富子の身体に取りつき、再び我がものにしようと豊雄に脅しをかける。物語の最後で、道成寺の法海和尚の力により蛇は鉄鉢に封じられ、豊雄は一命を取りとめる。「蛇性の婬」では、女が蛇になるのではなく、蛇が女に化けるという違いはあるが、最後に蛇が鉄鉢に封じられるところなど、本作に似通ったところもある。また、女二人と男一人の関係をベースとする点も共通すると言えよう。

能楽『道成寺』などで知られる道成寺伝説（安珍・清姫の伝説）も、淫や執念をテーマとする話である。様々な話のバリエーションがあるが、基本的な内容は次のようなものであろう。美貌の僧・安珍に一目ぼれをした少女・清姫は、夜這い

をかけて安珍に迫るが、安珍にうまく逃げられてしまう。怒った清姫は蛇と化し、逃げ続ける安珍を道成寺で焼き殺してしまう。この話は能や歌舞伎で題材としてとられたため、一般によく知られていたと考えられる。

本作では御隠居について、次のように述べられている。

先代の妻は実に優しい女で、夫の言ふことに何一つ負いた事がない。そして自分（清吉――河内注）を始め、下々のものをいたはつて使つてくれた。あすで二七日になるといふのは、この女の事である。八十歳の長寿をして、こなひだ死ぬるまで、毎日十人宛の乞食に二十五銭宛施すことになつてゐたので、近年は郡役所で貧窮のものを調べて、代り代り貰ひに来させることになつてゐた。若い奉公人の中には、「御隠居様のお客様」と云つて、蔭で笑ふものがあつたが、貰ひに来るものの感情を害するやうな事をしたものはない。

気になるのは、若い奉公人たちの中に、「御隠居様のお客様」と言って陰で笑う者がいたとされている点である。この「お客様」と言って笑うことに、五十代で夫を亡くした御隠居の性的なだらしなさの示唆を読みとるのは、穿ち過ぎであろうか。噂をしているのは若い奉公人の一部のようだが、御隠居からそのようなお誘いを受けたことがあるが故の噂・嘲笑ではなかろうか。一見何気ない噂だが、このように解釈できるとすれば、御隠居には蛇性が付与されていることになる。蛇となって化けて出たとお豊がとったのも、故なきことではないと言える。

ただ、淫と執念とでは、要素としてより重要なのは執念の方である。実際、葛飾北斎の「百物語」には「しうねん」（執念）と題し、青大将が位牌や干菓子等にまとわりついている画がある。蛇と女とを結び付ける要素としては、執念をまず第一に挙げなければならない。[注16]

執念をメインテーマとし、本作と重なるところ少なくない物語として、『因果物語』と柳亭種彦『近世怪談　霜夜星』（一八〇七年刊）を挙げることができる。前者は、殺された信州の女が蛇となって男の腰に巻きつき、離れようとしないといった内容の話である。以下は前掲『女と蛇』の引用。

寛文元年（一六六一）頃開板の『因果物語』（片仮名本）は鈴木正三道人の手控えをもとに、門弟たちが刊行した勧化的怪談集であるが、その上冊第五話は、「妬深女の死して男を取り殺す事、付女死して蛇と為男を巻く事」と

いう題で三つの話を収めている。最後の話が簡単なので、まずこれを紹介しよう。

大坂陣の二、三年以前、駿河府中いんれい町狐崎の近所、原田次郎左衛門宿（やど）、四、五間近所の者、信州へ行きて女房を求めて居けるが暫く在つて駿河に帰りけり。信州の女房来たる。其の有り様怖し。駿河の女房、是を見て逃げ行き、夫にかくと云ふ。夫、彼の女を賺（すか）し、三保の松原へ伴（つれ）て行き、舟遊びして海へ入れて殺しけり。

頓（やが）て蛇と為りて腰を巻く。何程切りても亦（また）巻くに依（よ）りて、為（せ）ん方無くして高野へ行きて居たると也。

ハナシの内容を可能なかぎり簡略に述べた素朴な文章だが、これは要するに駿河府中（今の静岡市）に住む男が、妻帯の身でありながら信州に行き滞在する間に、その土地の女を妻にしたのである。その男（武士とも商人とも書いてないが、話者はそんな事はどうでもよかったのだろう）が駿河に帰ったところ、信州の妻が追いかけてやってきた。「其の有り様怖し」、つまり嫉妬の権化となってすさまじい形相だったのだろう。駿河の妻（本妻か）が驚いて、夫に訴えたところ、夫は信州妻を三保の松原にすかし出して舟遊びにかこつけ、彼女を海に沈めて殺してしまった。ところがすぐに信州妻は蛇になって男の腰に巻きついて離れない。その蛇をいくら切っても、また元の通りになって巻きつくので、男は仕方なく高野山に登り、そこに住んだ、というのである。

信州[注17]の女が殺されて蛇となり、切っても切っても男の腰から離れようとしない。この話は、息子の嫁との不和から寂しく亡くなった信州の女が、蛇となって仏壇から離れようとしない本作によく似ていよう。女二人と男一人の関係である点も共通している。

柳亭種彦『霜夜星』五巻五冊については、三巻の内容が本作のそれを思わせる。ほとんどだまされた形で、お沢という名の醜い女性を妻にした伊兵衛は、かつて上総国の笠森観世音で会った両想いの美女・お花のことが忘れられない。ふとしたきっかけでお花の所在を知る伊兵衛。お花を側妾とする老人・伊藤快保の館の隣に、伊兵衛はお沢とともに引っ越し、お花のもとにこっそり通うようになる。二人の密通は快保に知れてしまうが、快保は体裁からお花を伊兵衛に与えようとし、食客の勧次にその世話を任せる。伊兵衛にはすでに妻・

お沢がいる。お沢との縁を切らなければ、伊兵衛はお花と一緒にはなれない。勘次の入れ知恵により、伊兵衛は放蕩し、博打に明け暮れ、お沢を虐待するようになる。耐えかねたお沢は入水自殺してしまう（ここまで『霜夜星』二巻）。はれてお花と一緒になった伊兵衛だが、新婚の初夜、天井から一匹の蛇が落ちてくる。「あっ」と言って飛び退くお花。伊兵衛が蛇を縁先に打ち捨てて閨に戻ると、蛇はすでに座敷に戻っている。伊兵衛は手燭の柄で蛇を突き刺し、庭に捨て、「ここは山沿いで水も近く流れているから、ままある事なのだろう。心配するな」とお花に言い、眠りにつく。翌朝目を覚ますと、最前の蛇が傍らでとぐろを巻いている。

『霜夜星』ではこのあと四巻で、伊兵衛と、伊兵衛とお花の間に産まれた子供二人がお沢に取り殺されてしまう。言うまでもなく、お沢という名は水＝水神としての蛇と関係があり、水は物語の展開上重要な役割を果たしている。つまり意味のある名前だ。なお、『現代語訳・江戸の伝奇小説⑤』[注18]の『霜夜星』の蛇が落ちてくる場面は、次のようになっている。

（略）伊兵衛が偶と心づき、煙草盆の抽斗から、光明寺にて里人より受け取った簪を取り出し、「この簪に覚えがあろう。これは情人を忘れ遣らぬ種なりしが、今はまた昔を語る賜物よの」などと言うて、閑談こまやかなる折しも、仰塵より礫と物音がして、枕辺に落ちる物あり、幽かなる短檠の火影にて見れば、大きさ二三尺（約六〇～九〇糎）もあろうかという蛇である。

お花が女の心弱さから「呀」と言うて飛びのくと、伊兵衛はこれを押し鎮め、右手に手燭を執り、左手に蛇を掴んで縁先に打ち捨て、閨房に戻らんとすれば、かの蛇は早くも先に帰り座敷にて頭をもたげ舌を吐いていた。伊兵衛は心中に、「昔より女の一念が蛇となりし例少なからず、お沢の一念も蛇となって予を怨むやも知れぬ。心弱くては悪しからん」と思い、手燭の柄にて蛇の胴中を突き通した。蛇は苦しげに尾と頭を一つに集めて手燭に纏わりついたが、そのまま庭に打ち捨てて閨房に戻り、「この所は山に沿い流れに対かう地なれば、かかる事もままあろう。恐るる事はないぞ」と、お花には言い捨えて打ち臥した。

ほどなく暁を告げる鐘の声に夢を破られ、伊兵衛が目覚めて枕もとの煙草盆を引き寄せたところ、最前の蛇が側らに屈まっていた。打ち驚き、煙管を取って打ちつければ、なお近寄りお花の簪を咥えて這い出でんとする。「此は心得ぬこと」と取らんとすれば、忽ち一団の陰火と

なり、屏風を越えて飛び出でた。水洒（ぞっ）としたものの、物音を立てればお花が目を覚まして恐れはせぬかと危ぶみ、そのまま衾（ふすま）（夜具）を被って眠りに就いた。

不幸な死をむかえた女が、蛇となって天井からやってきて、捨てても捨てても戻ってくる。これは本作の蛇の描写に近いと言えよう。本作は千足、お豊、御隠居の三者の関係を描き、『霜夜星』は伊兵衛、お花、お沢の関係を描いている。『霜夜星』では、男を他の女にとられた女が死んで蛇になっている。本作では千足と御隠居は親子だ。しかし、千足がお豊の味方をしたために寂しい一生だった、つまり、息子を嫁にとられたと御隠居が思ったとすれば、『霜夜星』の三者の関係と重なると考えられる。加えて、お沢がお花を怨むのは、お花が美しいからでもあるが、本作のお豊も美しいとされている。怨まれる方の女が美しいとされている点も共通していると言えよう。

『霜夜星』の蛇・お沢は、何度も戻ってくるだけでなく、他人の身体に取りつき、しゃべり、取り殺すこともできる。『霜夜星』四巻では、お沢の怨念により、金吾という男の気が違ってしまう。本作のお豊が仏壇に見たのは、即座に彼女の気が違ってしまったことなどからも、このような前近代的な蛇と考えられる。本作は理学博士の一人称の小説であるため、近代科学的な意味でリアルな現実が主として描かれている。しかし、蛇に死者の祟りをみる前近代的な意味でリアルな現実もまた、お豊や穂積家の奉公人たちによって生きられている。そのような意味で、近代と前近代の混じり合った世界、と言うことができよう。(注19)

四　近代的現実のなかに残り続ける前近代性

三では蛇＝死者の怨念とする前近代的な見方について述べた。それでは、「己」や千足のように、蛇は一（いち）動物に過ぎないとする近代的・合理的な見方をすると、どうなるか。この場合、蛇が仏壇にいることについては二つの可能性が考えられる。一つは言うまでもなく米蔵から天井を伝ってやって来た可能性。もう一つは誰かが連れてきて置いた可能性である。誰かの仕業だとすると、それは誰か。考えられるのは千足である。

千足が仏壇に蛇をもってきて、お豊の気を狂わせたというのは、突拍子もない意見に思えるかもしれない。しかし、あり得ないことではあるまい。

「なる程さうでせう。兎に角わたくしも或る場合には打つても好いといふ位な、堅固な意志を持つてゐましたら、可哀相に妻をあんな物にはしませんでしたらう。ああ。亡くなつた母も気の毒ですが、妻も実に気の毒です。」

主人はぢつと考へ込んでゐる。

己は問うた。「一体気の変になられたのは、どう云ふ動機からですか。」

腕組みをしてゐた清吉爺いさんが、手をほぐして膝を進めた。「実に申し上げにくい事でございますが、先生が理学博士で入らつしやると承りまして、お泊りを願ふことが出来ましたら、それを伺つて見たいと存じてをりましたのでございます。初七日の晩でございました。奥さんが線香を上げに、仏壇を覗かれますと、大きな蛇のとぐろを巻いてゐましたのが、鎌首を上げて、ぢつと奥さんのお顔を見たさうでございます。きやつと云つて倒れておしまひになりましたが、それから只今のやうにおなりになりました。わたくし共も驚きまして、若い者の中に好く蛇抔をいぢるものがございますので、掴まへさせまして、野原へ棄てに遣りました。主人は新しい学問もいたしてゐるものでございますから、なに、蛇といふものは気圧なんぞを鋭敏に感ずるものだから、暴風雨の前なんぞには、馴れた棲家を出て、人家に這入り込むことがあるさうだ。仏壇にゐたのは、全く偶然だと申してをりました。ところが、翌朝になつて仏壇を見まするとと、蛇はちやんと帰つてゐるのでございます。わたくしも此度は前より一層驚きました。（略）実はこれにをられまする主人には、直ぐに相談いたしましたが、なに、あんなきたないものをいぢらなくともの事だ、いつか逃げてしまふだらうと申して取り合ひません。迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥ぢ入りまする次第でございまするが、先生がお出でになりましたら、伺つて見たいと存じまして。」

主人は苦々しさうな顔をして、黙つてゐる。

仏壇に居座り続ける蛇について相談しても、千足は取り合わなかったと清吉は言っている。また、取り合ってくれなかったということを清吉が「己」に話すのを聞いて、千足が「苦々しさうな顔をして、黙つてゐる」というのも、疑われるかもしれないという危惧からではないか。「己」と清吉の話に突然割って入ってきて、女性のエゴについての話題をもちだしたのも、清吉が聞きたがっていた蛇の迷信の話からそらすためとも解せられよう。蛇のことがはっきり迷信だと証明されて

しまうと、これからのお豊の治療に関わる。小説の最後、学問も経済力もあるにもかかわらず、妻の精神病を専門家に診せていないというのも、治す気がないようにとれる。言うまでもなく、千足が犯人だとすると、動機は母と自分の復讐である。

仏壇に蛇がいることについて千足が疑われないのは、天井に隙間があるからだ。隙間があると指摘されたからこそ、読者も含めて、蛇は天井から来たのだと思う。蛇がいるのは誰かの仕業ではないかと誰も疑わない。確かなのは、蛇が仏壇にい続けているということだけで、蛇がどうやって仏壇にやって来たのかは、仮に犯人がいるとすれば犯人以外、誰も知る者はいないのだ。蛇は天井から来たと断定はできない。第一、これまで仏壇に蛇が来たことなどないのに、狙ったように初七日の晩にいるというのは、不自然というよりも人為的なものが感じられはしないか。千足が仏壇に蛇を置いたのだとすると、天井の隙間は千足の犯行から目をそらさせる、隠れ蓑の役割を果たしていると言える。

ただ、この場合、千足が天井の隙間を知ってて隠れ蓑に利用したとは考えにくい。千足は隙間があることに気付いていなかったと想像される。気付かなかったからこそ、「蛇が怨念のごとく、どこからともなく現れた」とお豊に思わせることができると思い、仏壇に蛇を置いたと考えられる。天井に隙間があることを千足が知っていたとすれば、「蛇は天井から来たに過ぎない」とお豊が合理的に判断するかもしれないと考え、千足は別の方法を考えたのではないか。[注20] たまたま「己」が天井の隙間を見つけたため、蛇＝怨念は迷信と片付けられてしまったが、その代わりに千足の犯行はうまくごまかされたのではあるまいか。

以上のように、蛇が仏壇にい続けることについて科学的・合理的に考えた場合、本作は次のようにまとめることができる。すなわち、本作は、女が死んで蛇となって復讐する物語の前近代的なリアリティを、母と自身[注21]の復讐のために利用する男の話である、と。そしてこのようにまとめた場合、「血走つた目」をした、夢遊病者のような歩き方をする千足の中に、読者は蛇のようなものを感じないだろうか。千足は身体も弱く、外見的にもひょろひょろとしたイメージがあるが、その性質にも、この怨みはらさでおくものかといった執念深さや、生き地獄を味わわせてくれようといった残忍さなど、伝説の蛇に通じるものがある。小説のタイトル「蛇」は、実は、主に千足を指しているのではあるまいか。

近代科学は前近代のリアリティを迷信とみる見方を人々に与えてくれる。新しいリアルな現実を見せてくれる。しかし

ながら、その新しい現実を生きる人間（千足）の中に、前近代的な蛇は生き続けており、科学はそれを払拭しさることはできない。追い出しても追い出しても、蛇は人々の中にいつの間にか戻っていることだろう。蛇足という言葉があるように、蛇のような人物の名が千足（千本の足）とされているのはアイロニーだが、近代的な学問を修めたエリート・千足の中に、前近代の蛇が巣食っているというのも皮肉と言えば皮肉だ。科学は「迷信とか申すもの」という見方を教えてくれるが、近代的現実の中に前近代は形を変えて生き続けているというメッセージを、本作からはくみ取れると考える。

本稿の二で、本作には近代と前近代の入り混じった境界線上から、近代の方へ向かう流れがあると述べた。いかにも近代に向けて進んでいるが、以上三と四で述べたように、前近代的な要素はなくなる訳ではない。お豊や奉公人たち、他の作家の小説では夏目漱石「蛇」[注22]の「叔父さん」のように、前近代の物語的現実を生きる者も少なからずいる。また、近代的現実を生きる者の中に、前近代の物語は形を変えて延命してもいる。近代に向かう流れには、前近代の現実が不可分に溶け込んでいると言えよう。

注

注1　以下、「蛇」本文の引用は『鷗外全集　第七巻』（昭和四十七年五月　岩波書店）による。なお、本稿における引用文中の傍線は全て筆者により、旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜省略した。

注2　『文学・語学』（令和元年八月）。

注3　「迷信と大逆――鷗外『蛇』『里芋の芽と不動の目』、そして永錫会」（『聖心女子大学論叢』平成二十年八月）。

注4　「森鷗外「蛇」と普通選挙運動」（『国文学論集』平成二十五年一月、上智大学）。

注5　「森鷗外・『蛇』の新しさ――貫流する〈理性〉」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』平成十二年三月）。

注6　『国文学　解釈と教材の研究』（昭和五十五年十一月）。

注7　「鷗外晩年の境地「知足」についての一考察――「蛇」「高瀬舟」「委蛇録」を中心として」（『九大日文　11』平成二十年三月）。

注8　全五巻、平成五～平成八年、岩波書店。

注9　平成二年三月、汲古書院。

注10　金井英一「林太郎はペルセウスになれたか――森鷗外の短編『蛇』の意味するもの」（東海大学外国語教育センター異文化交流研究会編『日本の近代化と知識人』（平成十二年二月）収録）には、「ドイツから帰国して二年後の明治二十三年八月、鷗外は臨月間近い妻登志子（旧姓赤松）を上野花園町の新居に残し、ひとり信州の山田温泉に遊んだ。八月十七日から二十七日にいたる僅か旬日の旅であったが、短編『蛇』はその時の体験が基になったとされる。この温泉行については別に紀行『みちの記』が残されている」とある。

注11　全二十巻、昭和四十七～五十一年、小学館。

注12　全五巻、昭和五十七～平成十一年、角川書店。
注13　縮写版第二刷、全十三巻、昭和四十三年十月、大修館書店。
注14　平成十一年一月、筑摩書房。
注15　『諸国百物語』（一六七七年刊）など、男が蛇になる話も数は少ないが存在する。
注16　同時期の小説では、岡本綺堂『飛騨の怪談』（大正二年三月　鈴木書店）に、蛇の申し子と噂されるほどに執念深いお杉という人物が登場する。この小説は、登場人物たちの設定や駅という場所の設定、迷信という言葉が見られることやヒステリーを「狂人」に譬えることなど、本作に似通ったところがある。
注17　信州と蛇のつながりで言えば、黒姫伝説というのがある。黒竜が小館（おたて）城の黒姫に惹かれ、蛇や若武者に化けて姫を妻にしようとする話で、長野県北信五岳（ごがく）の黒姫山が、この伝説と関係のある山とされている。日本児童文学者協会編『長野県の民話』（昭和五十六年三月　偕成社）の「黒姫ものがたり」、「信濃の民話」編集委員会編『信濃の民話』（平成二十年十月　一草舎）の「黒姫物語」等を参照。
注18　須永朝彦訳、平成十五年三月、国書刊行会。
注19　本作と同時期の小説では、泉鏡花「南地心中」（『新小説』明治四十五年一月）なども、前近代的な蛇の出てくる世界を描いている。この小説では、お珊という女性が、蛇と同化したような人物として描かれている。少し後になるが、岡本綺堂「蛇精」（『苦楽』大正十四年五月）等も加えてよいであろう。
注20　もっとも、『霜夜星』でお沢の蛇が天井からやって来たことからも、お豊が天井に隙間があることを知っていたとしても、仏壇の蛇を近代科学的に見るとは考えられないが。しかしながら、科学的・合理的な見方をする者・千足にとっては、天井に隙間があることは計画として致命的であろう。
注21　清吉によると、千足は身体も弱く、清吉が「女房を持たせられると聞いた」時は二、三日はそわそわしたのに対し、千足は美しい妻を迎えることも、どうでもよさそうに見えたという。また、二人の間に子供ができなかったことなどからしても、お豊が御隠居に辛くあたったことの原因には、単に女のエゴというだけでなく、夫婦間の性の営みがうまくいっていなかったことなども考えられるのではあるまいか。だとすれば、御隠居に対するお豊の仕打ちには、千足へのあてつけもあった訳で、そのあてつけに対する復讐、さらには寂しい家となってしまったことへの復讐など、自身のための復讐という目的もあったと言えよう。
注22　『四篇』（明治四十三年五月　春陽堂）収録。

（こうち　しげお・北九州市立大学文学部准教授）